

「越谷市内出羽地区の歴史」

加藤幸一

出羽地区と会田出羽家、会田七左衛門家

江戸時代の前のこと、現在の出羽地区は沼沢地であった。その沼沢地を越ヶ谷領の開発の一環として手掛けたのが会田（あいだ）出羽家の会田出羽資清（すけきよ）である。その子、資久（すけひさ）は、現在の御殿町及びその南隣の越ヶ谷五丁目にかけての広大な敷地を持っていたが、その敷地の一部である現在の御殿町あたりを越谷御殿の建設のため徳川家康に提供している。

さらに、資久の養子に、後の会田七左衛門政重（まさしげ）がいる。会田七左衛門家の初代となる。会田出羽家の分家といえる。七左衛門政重は、現在の出羽地区を開墾し、七左衛門新田【槐戸（さいかち）新田ともいう、綾瀬川沿いの槐という木々に甲虫が沢山いた】を成立させる。後に七左衛門村と称する。

その後かつての七左衛門新田の地域である七左衛門村からは、さらに越巻村と大間野村を分村させる。元禄八年（1695）には、七左衛門村、越巻村、大間野村の三村にすでに分かれていたことがわかる。

なお現在の出羽地区の「出羽」は、明治二十二年の町村合併の時に生まれた「出羽村」からきているが、その「出羽」はこの地域に流れている出羽堀に由来する。その出羽堀は、新編武蔵風土記稿によると会田出羽介正之（でわのすけまさゆき）が作ったとされる。山崎善司氏によると、会田出羽介正之は四町野村会田太郎兵衛家（太郎兵衛糯で知られる）の先祖で、七左衛門政重による開発前に出羽堀ができたと推定している。

「新編武蔵風土記稿」の「越ヶ谷宿」の項

『出羽堀 宿の坤（ひつじさる）の方を流る、悪水堀を云、相傳ふ、曾田出羽介正之、當所に住し、掘開きしをもてかく唱ふ、曾田氏のことは、後谷村舊家富右衛門の條見るべし』

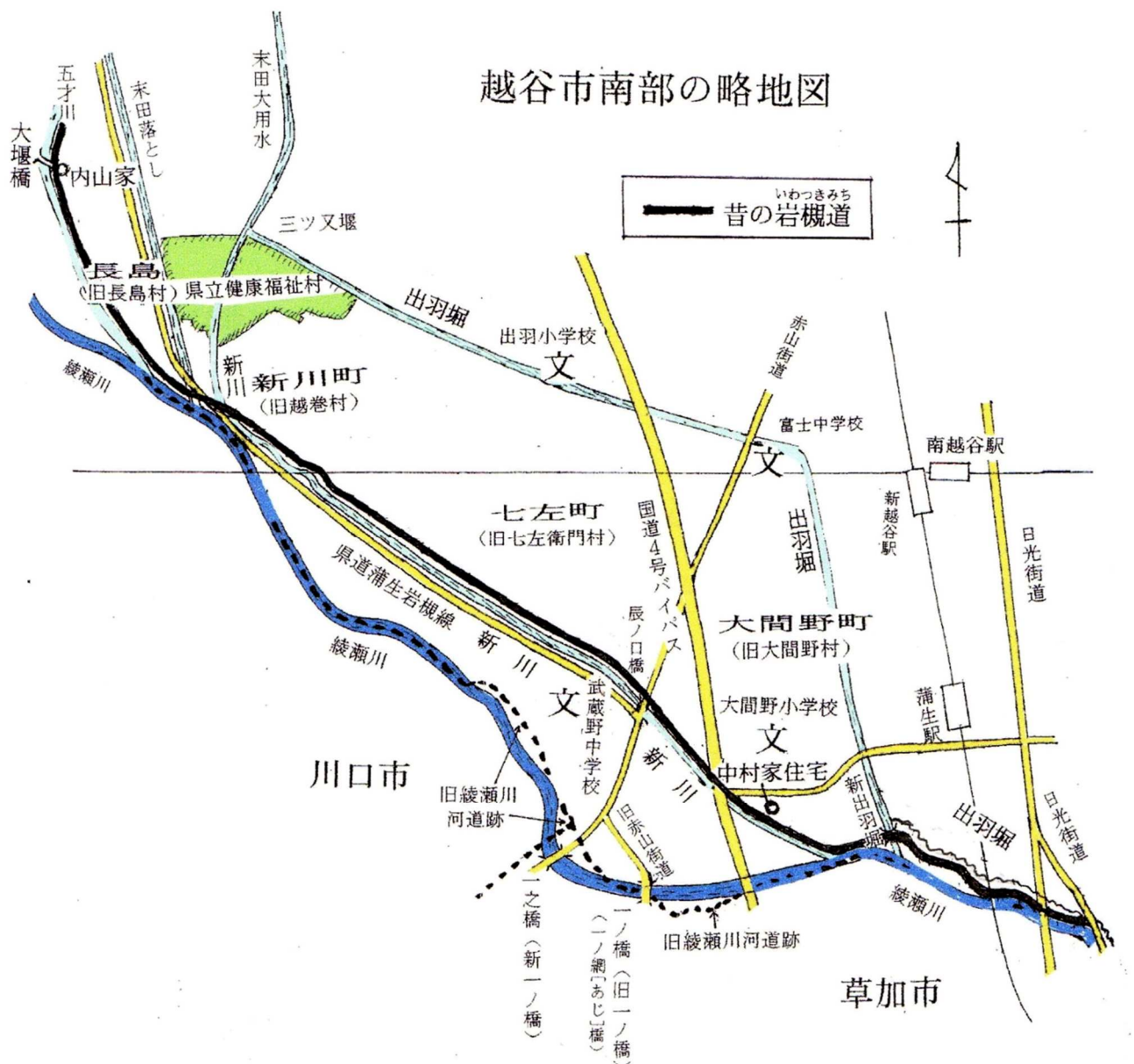
1. 三ツ又堰と出羽堀

会田出羽介正之（でわのすけまさゆき）が出羽堀と唱えたとされる。出羽堀の流路は、現在の健康福祉村の「ときめき元気館」の北方にある三ツ又堰（みつまたぜき）で末田（すえだ）用水から分かれて西流し、出羽小学校や三ツ谷（みつや）稲荷、三ツ谷地蔵のそばを通り、富士中学校そばから南流し、途中の西浦橋北方あたりから西流し（現在、出羽堀はそのまま南流して綾瀬川に流れ注ぐ。この新しくできた西浦橋あたりから綾瀬川までの流路を「新出羽堀」という）、蒲生一丁目の久伊豆神社そばや蒲生橋（古くは出羽橋）、蒲生の一里塚のある愛宕神社、そして綾瀬川に流れ注いでいた。

2. 江戸時代の新川と岩槻道

江戸時代は、現在の新川は古綾瀬川とも言われ、その左岸（北側）に岩槻道があった。現在の綾瀬川は新綾瀬川と呼ばれていた。

宝暦十一年（1761）の長島村内山家所蔵の新川筋絵地図によると、新川は、現在の県民健康福祉村の北隣にある三ツ又堰より県民福祉村の中を通り、この新川が綾瀬川に注ぐ綾瀬川の落とし口までを指す。この古絵図によって新川が江戸中期の宝暦十一年には既に完成していたことが分かる（加藤）。



3. 縄文時代の丸木舟の発見地

以下は、草加ペンクラブの染谷冽氏・松本孝氏の文章より抜粋。

草加市立歴史民俗資料館の展示室に「縄文時代の丸木舟」が透明ケースの中に納められている。ヘサキとトモがほぼ原形をとどめており、長さ606センチ、幅67センチで、かつおぶしの形をしている。

昭和四年の春、綾瀬川の川底さらいの時、金明町地内から発見された。平成十三年に科学的分析を行った結果、約5300年前の縄文時代前期のものであることが判明した。用材はカヤである。

この丸木舟が発見された時のことを、田中捷一郎氏が、昭和五十七年十一月二十日の「広報そうか」で語っている言葉が興味深い。当時、教員であった氏に、綾瀬川の改修工事に携っている現場監督と知り合いの同僚がいて、その同僚から古代の丸木舟らしいものが発見されたという情報を得た。学生時代に丸木舟のことを学んだことのある氏は、ひょっとしたらとを感じるものがあり、急ぎ現場に走ってみると、綾

瀬川の川辺に丸木舟が引き揚げられていた。

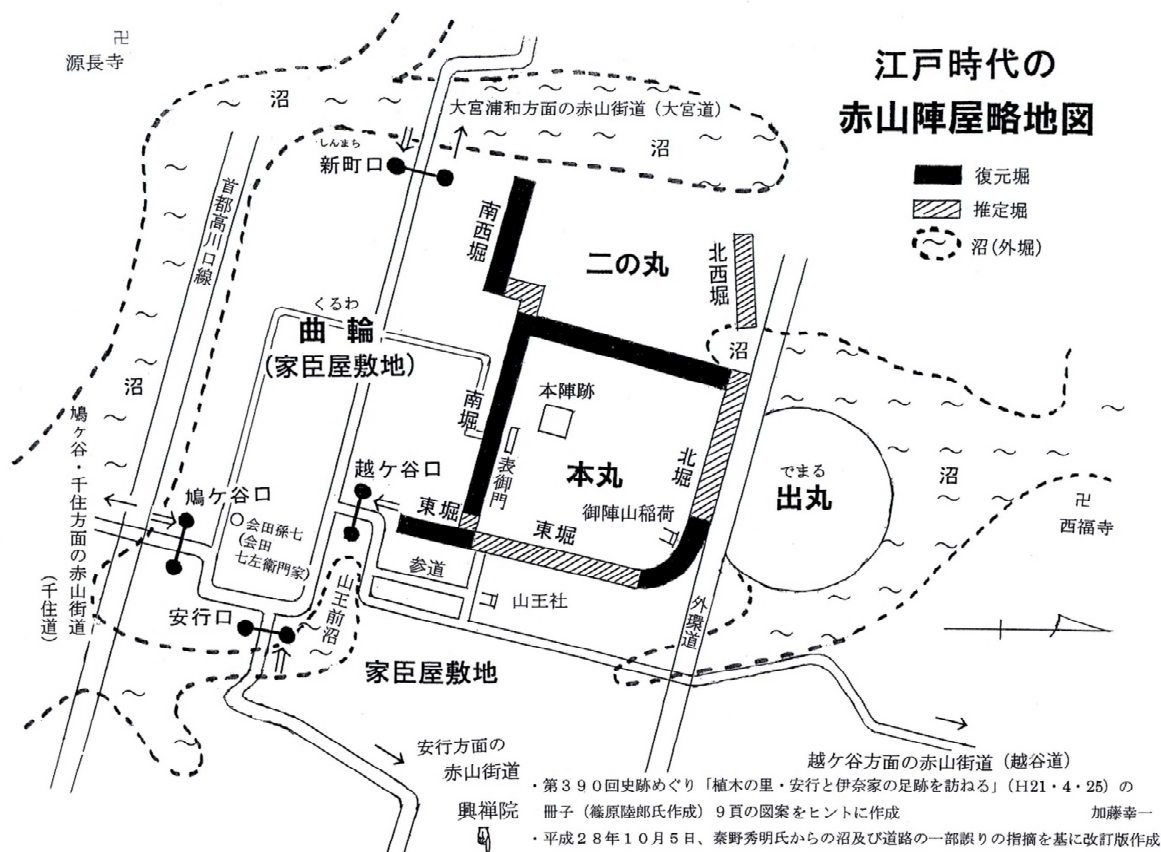
後日談によると、舟は川のほぼ中央にあったため、引き揚げの際に、どちらの岸へ揚げるかが問題となったが、作業がしやすいという理由で新田側に引き揚げた。反対側に引き揚げていたら、この古代の貴重な資料も、今は越谷市のものになっていただろう、と言う。(以上、染谷洸氏・松本孝氏の文章より抜粋)

以下は加藤幸一が加筆。

この丸木舟は古代よりさらに古い 5300 年前の縄文時代前期と判明したが、現在の越谷市側の新川（古綾瀬川）から流れてきたものであろう。そういう点では越谷市に縁があるといえる。

4. 赤山街道

越ヶ谷から川口にある赤山陣屋の越ヶ谷口まで通じる赤山街道は、越ヶ谷小学校の旧・正門前を通り、地元では鳩ヶ谷道と呼ばれた。綾瀬川の手前、現在は新一の橋を渡る直線の道となっているが、本来は新一の橋あたりは広大な大沼が広がっていたので、その大沼を迂回して下流の旧一の橋を渡る道であった。この道は昭和 40 年頃まで越ヶ谷駅から川口駅までバスが通っていた主要な道であった。



5. ゆずり橋

ゆずり橋は、赤山街道の下を横切って流れる角左堀（かくざぼり、角左衛門堀）に架かっていた橋で、現在の山田うどん七左店の南側あたりにある。以下は「中川水系総合調査報告書2」より抜粋。

この「ゆずり橋」というのは、村中の悪霊を他へゆずり払う場所という意味だという。現在でもこの出羽七左衛門地区には、百万遍が行われている。神主に切ってもらった御幣と寺で受けた木札を持って子供たちが、数珠玉の直径10センチメートル、長さ18尺（5.4メートル）もの大数珠を持って、笛や

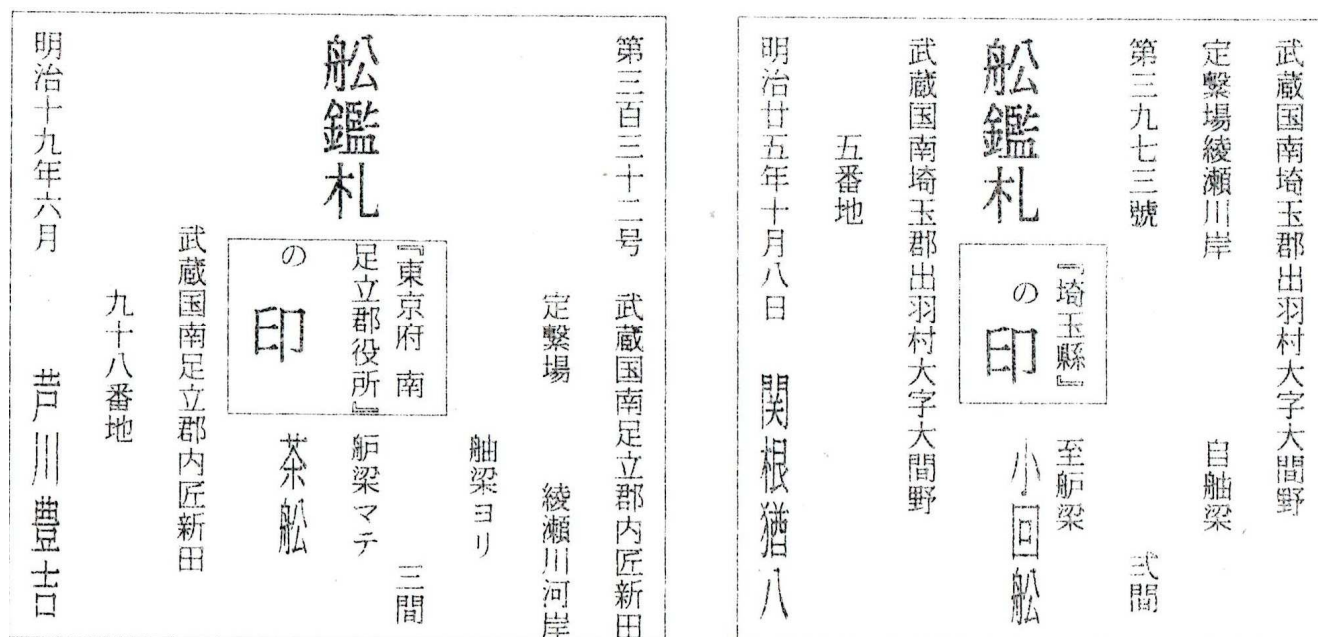
太鼓に合わせて「ナイダー、ナイダー」と唱えながら、村中の家一軒一軒を廻ってお祓いをし、戸袋にさきほどの木札を張り付けて歩くのである。四谷―上組―根郷―中組と回り、最後に「ゆずり橋」のところに御幣を納めるのである。唱え言葉の「ナイダー、ナイダー」は、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」のなまったものと言われている。

6. よしずや河岸と弁天藤

綾瀬川周辺の沼地や湿地では、ヨシズやレンコン、クワイなどが生産され、赤山街道沿いの二つの河岸場である「二つ橋河岸」と「よしずや河岸」（「一のあじ橋」そばの関根家）から出荷していた。

よしずや河岸は綾瀬川の河岸場として栄え、近藤勇も愛でた弁天の藤があった。近藤勇は、越ヶ谷から板橋への護送の途中、赤山街道の綾瀬川に架かる一の橋（現在の旧・一の橋、当時は「一ノあじ橋」と呼ばれた）のたもとの「よしずや河岸」の茶屋（関根氏）で休息し（四月五日とされる）、弁天藤（現在は、出羽公園に移植）を見ながら、「綾なる流れに 藤の花匂う わが生涯に 悔いなし」との辞世の句を詠んだとの言い伝えがあるが、確証はない。実際には、板橋で偽名がばれたあとに辞世の漢詩を詠んでいる（四月二十五日）。近藤勇は以下のルートで板橋宿に護送された。

流山（馬）⇒越ヶ谷宿の大沢（山駕籠）⇒浦和宿⇒田島村（梅古木）⇒荒川の笹目の渡し⇒板橋宿（処刑）



上記の船鑑札2枚は、大間野町五丁目の「よしずや」（関根家）宅に保管されているものである。その解説文である（作成は加藤）。この中に出てくる「関根猶八」は、現当主関根弘良の曾祖父のさらに上の父にあたる。「南足立郡内匠（たくみ）新田」とあるのは、綾瀬川沿いの現在の足立区南花畑（はなはた）三丁目（旧、内匠本町）あたりである。「内匠新田九十八番地」は、現在の南花畑三丁目三七番地に相当する。かつてはここに芦川姓が二軒あった。

7. 谷中村の観音堂の「白馬」伝説

谷中の観音堂には、困った時にどこからともなく現れて助けてくれるという白馬の伝説が伝わっている。出羽小学校の外壁に描かれた「白馬」は、その白馬伝説より採用したものである。

「出羽の歴史散策マップ」の「出羽地区に伝わる昔話」を参照のこと。

8. 谷中村三ツ谷の「三ツ谷地蔵」伝説

「出羽地区の石仏」 40 頁「三ツ新田と三ツ谷部落」「三ツ谷地蔵の伝説」を参照のこと。

9. 越巻村の「大雄山」伝説

「出羽地区の石仏」 57 頁「大雄山碑石のいわれ」を参照のこと。

10. 七左衛門村の大沼社の「兵（もののふ）」伝説

「出羽地区の石仏」 56 頁「大沼伝説」を参照のこと。

11. 「辰の口」伝説

江戸時代、岩槻道と赤山道とが交差する地点に新川（古綾瀬川とも呼ばれた）を跨ぐ土橋「辰の口橋」が架けられていた。

この「辰（龍）の口」には二つの伝説がある。一つは、赤山街道沿いの水路の水を新川の下をくぐって対岸（新川の南側）に流すために作った穴に、水路の水が吸い込まれるように激しく落ち込んでいて、それが辰（龍）の口のようなだったといわれる。もう一つは、川底の下をくぐっている大きな穴は、竜が川底の地中から激しく水を巻き上げ、空に舞い上がった時にくぐってできた穴の跡であるという言い伝えである。つまり、水が竜のように流れ落ちた穴と竜が地中から天に舞い上がった穴の2種類の伝説である。

耕地整理が行われる昭和三十年代初頭までは、北から流れてきた赤山街道沿いの用水路が、新川の川底の下をくぐるように流されて（伏せ越し）いたが、新川の水面は、赤山街道沿いの用水路の水面よりかなり低かったので、渦を巻くように激しく流れ込んでいたのである。そして新川の下をくぐり抜けた水は、対岸の高い土手道となっていた赤山街道の西側の地点から吹き出すようにして出て、「生け簀（す）」に流れ込み、その水は、すぐそばの「大沼」に落されたり、赤山街道を越えて、赤山街道の東側の、現在の大間野四丁目や五丁目に用水として流されていた。

なお、出羽小学校の壁面に「辰の口」伝説由来の登り竜が描かれている。

12. 疣（いぼ）稲荷

県立図書館蔵「埼玉日報」（昭和30年代の記事）より以下転載する。

「納涼・越谷夜話 ～出羽の疣稲荷～」

越谷町出羽四丁野、曲がりくねった細い道路の傍らに疣稲荷がある。この稲荷はとにかく古い。その昔この辺りがまだ船着き場であったころ、漁師が信仰したものらしい。疣稲荷のご利益はおよそ疣と名のつくものならば何でも取れる。何でも落ちるといわれている。

正一位疣稲荷の境内はさして広くないが、社の裏手に古木がある。疣で難渋する人々は神社を参詣してからこの古木に触り、さらにこの手で自分の疣に触れる。すると不思議なことに疣は痛くもかゆくも

なく、いつの間にか自然に取れる。そういう言い伝えである。油揚げを一枚あげる。これは治った時のお礼の印で、その油揚げは森に住んでいる狐が食うーそういう話である。

ある夏のことである。東京からこの付近の農家へ嫁に来た若い女は農家の特有、理解のない姑にいじめられて激しい野良仕事に身体の休まる暇が無く、涙の乾く日がなかった。どうか気の荒い姑の心の角（ツノ）が取れますように・・・嫁は毎日心に念じていた。

ある夜、家人が寝静まってからこっそりこの疣稲荷へ参詣した。一週間の願掛けを終わった。満願の夜、嫁は姑の」言いつけで姑の髪を結わった。暗いランプの下で嫁の手は自然と姑の頭へさわった。心の角がポキリと折れて疣稲荷のご利益があらたかだったと嫁は心の底から喜んだ。

平和な家族の一員になって嫁は涙を流しながら社前にぬかづいた。立ち上がって道路へ出ようとする白衣の老人がスーッと眼の前を通った。振り返ると油揚げはもうなかったという話である。疣稲荷の境内には寛政六年とそれから天明四年と当時疣稲荷を信じた人々が寄進したと思われる青面金剛の碑石が二つ、苔むして今までも残っている。

空にかかった片割れ月が静かに疣稲荷の神秘を語っている。疣稲荷が信仰する人は今でもまだあるようである。（以上は「埼玉日報」（昭和30年代の記事）からの転載）

以下は、谷岡隆夫氏による利根川栄一氏からの聞き取り調査である。今の梅檀（せんだん）の木二本は昭和後期、安行の植木屋に頼んでわざわざ千葉からとりよせたもの。宮本小学校にも記念に一本植えた。宮本小学校の双葉の校章はイボ稲荷の梅檀の木から取り入れたものであるという。

下記の文章は、平成23年9月1日（木）越谷市立宮本小学校発行「みやもと9月号」に掲載された文章である。校章に地元のイボ稲荷の木に由来すると思われる双葉の図案が含まれているのがわかる。

○宮本小学校の校章の由来

NPO法人越谷市郷土研究会 加藤幸一様より、本校の校章について教えて頂きましたので、ご紹介します。

この校章は、越谷市章の一部である「コ」を四つ外側にして、「コ4」つまり越谷を表し、中央には地元の地名である『宮本』の字を入れ、下には双葉の図案があり、宮本小学校の児童がすくすくと上に向かって伸びていく願いを込めて描かれています。



この校章の作成者は、湯浅和代様です。

追加資料

1. 宮本町のいわれ

宮本町は、昔は四丁野村^{しちょうの}と呼んでいた。越ヶ谷の久伊豆神社の神輿を担ぐのは、四丁野村の人と決まっていたので、久伊豆神社のお宮の元だという意味で宮本町と名付けられた。

越ヶ谷宿ができる前の江戸時代初期までは、つまり、元荒川が花田村の周りを迂回して流れていた流路を直道にして今日のような流れができた寛永6年以前までは、四丁野村は現在の天嶽寺や越ヶ谷の久伊豆神社方面まで陸続きで続いていて、天嶽寺や久伊豆神社は四町野村の一部であったと考えられている。ということからしても、久伊豆神社のお宮の元であったとして、宮本町と名付けたのである。

そして元荒川の自然堤防上に位置している四丁野村は、中世においては広大な越ヶ谷郷の中心地であったのであろう。越ヶ谷郷の範囲は、岩槻区鉤上まで含まれたことが分かっている。

2. 太郎兵衛糯

現在の宮本町の地に、昔（慶長年間）、会田太郎兵衛という人が四丁野村の名主として住んでいた。後の会田本太郎家である。会田本太郎家の敷地（現在の角栄団地）の周辺には構え堀があった。

会田太郎兵衛は、低湿地に適し、おいしい糯米の稲を見つけ、後に太郎兵衛糯と名付けられた。太郎兵衛糯は甘みとコシ、粘りあり、とても美味しい糯米、明治大正の品評会で何度も賞をとる。昭和になると、東京の和菓子屋が争って出羽村を訪れ、太郎兵衛糯を買い求めた。和菓子は勿論、赤飯、餅などに適している。

草丈が1 m以上と人の背丈近くまで伸び、台風などで倒れて茎が折れてしまう欠点があるため、栽培に手間がかかり、戦中はほとんど作られなくなった。しかし、出羽にはその糯米をほそぼそと作って守った人（秋山家）がいたので、何とか太郎兵衛糯が今日まで残ることができた。

※太郎兵衛糯は、江戸時代、赤山陣屋の許可を得て、遠く茨城県谷和原村（つくばみらい市）にも伝わり、現在、つくばみらい市の地元の特産品となっている。太郎兵衛糯の出所がはっきりしている。

※瓦曾根村の名主の中村家の江戸幕府に献上する御前細糯と出羽地区で栽培されている太郎兵衛糯との混同がみられ、誤った説が広く流布している。幕府の大奥に献上した糯米は御前細糯であるのに、地元を知らない研究者が誤って太郎兵衛糯と流布したものであるという。（高崎力氏による見解）

※以下はインターネットより抜粋（越谷 ii ネット）

慶長5年（1600年）中村彦左衛門一栄氏が、駿河国沼津に居城していた徳川家康に「太郎兵衛もち」を献上しました。食味が優れていたため、その功績に対し短刀「信国」が下賜されました。その後江戸城の大奥御用米として献上され、大奥の人達が食するため宝暦9年から毎年買い付けが行われたと言われています。太郎兵衛もちは粒が精細であるため「御前細もち」と呼ばれるようになりました。昭和天皇のご即位式に際し、竹の籠に笹で化粧した「かがみもち」や現在の天皇誕生の時も、精選白米2俵が献上されています。

・上記の文章は、瓦曾根村中村家の御前細糯の内容である。太郎兵衛糯とは関係がない。

御前細糯の信国の短刀の話は、言い伝えであって、根拠がなく、歴史的事実としては極めて疑わしい。最後の「昭和天皇の御即位式〜」は、「御前細糯」の名称は明治になると姿を消したため、太郎兵衛糯のことと思われる。

3. 宮本小学校の校章の由来

越谷市章の一部である『コ』を四つ外側にして、「コ4」つまり越谷を表わし、中央には地元の地名で

ある『宮本』の字を入れ、下には双葉の図案があり、越谷市立宮本小学校の児童がすくすくと上に向かって伸びていく願いを込めて描かれています。

この双葉の図案は、故人となられた地元の利根川栄一氏（宮本町2-123）によると、地元のイボ稲荷に生えている木を指しているそうである。しかしながら、谷岡隆夫氏によると双葉の図案と梅檀の葉とは、違うように思われ、校章とは無関係ではないかと推定している。今のところ、図案の双葉が疣稲荷の御神木を象徴しているのかどうかは、はっきりとはわからない。

もし、疣稲荷の木を象徴しているのなら、「梅檀は双葉より芳し」（この諺でいう梅檀とは白檀の別名であるが、疣稲荷の梅檀の木は白檀とは全く違う木ではある）という諺にも関連づけて、児童のたくましく健全な成長に願いを込めているのではないだろうか。

現在、宮本小学校にも利根川栄一氏によって植えられた疣稲荷の木である梅檀の木が校舎の東にある。校章の作成者は、神明町1-124の湯浅和代氏とのことである。

4. 迎摂院（こうしょういん）

江戸時代に江戸幕府の代々の将軍からもらった朱印状があります。由緒のあるお寺である。

朱印状は、将軍の赤い印（朱印）を押して発行した書状で、これによって、お寺の領地が認められ、年貢を納めなくてもよいことになった。朱印状があるお寺を「朱印寺（しゅいんでら）」とも呼ばれていた。江戸時代は、越ヶ谷の久伊豆神社の神主も勤めていた。

古くから迎摂院は、越ヶ谷郷の総鎮守である越ヶ谷の久伊豆神社や越ヶ谷中町の鎮守である浅間社の別当寺（神社に付属して置かれた寺院で、その神社の祭祀や管理などの支配権を持つ）であり、江戸時代を通して、神仏混淆のもとで、越ヶ谷久伊豆神社の神主も兼ねていた由緒あるお寺であった。

なお、将軍から朱印状が出された寺社領は、年貢などの免除を保証され、朱印地と呼ばれた。

5. 神明町のいわれ

神明町は、昔は「神明下村」と呼ばれていた。「神明ノ下村」とも言われた。

今の元荒川に架かる神明橋がなかった頃、ここに神明神社があった。神明下村の鎮守さまである。つまり、現在の神明橋のたもと付近に神明社があって、この神明社を起点に村が周辺に広がっていた。村の名前の由来は、この神明社（地元では「お神明様」と呼んでいる）からきている。

現在の神明社は、神明町2-15-1（越谷市小児夜間急患診療所の道路反対側）にある。ここに移転してくる前は、北越谷駅から神明交差点に通じる道路沿いの神明町2-39にあった。

6. 天王社（天王神社）

天王社（てんのうしゃ）は、牛頭天王（ごずてんのう、スサノオノミコト）と呼ばれる天王様をまつる神社である。旧暦の6月15日が天王様の縁日である。ここでは、1か月遅れの7月15日の近くの土日に地元の人たちが天王神社の集会所に集まってお祭りを行っている。

江戸時代からの天王社であるが、明治になって八雲社と改称したようである。しかし、今でも「天王様」と呼んで地元で親しまれている。

スサノオノミコト（素戔鳴尊）は、櫛から元に戻した櫛名田比売（クシナダヒメ）を妻として、出雲の地に行き、そこに住まい（宮殿）を建てた。そこでスサノオノミコトは、「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠（ご）みに 八重垣作る その八重垣を」と詠んだ。八雲は出雲の国を示しているが、天王様、スサノオノミコト、「八雲」の和歌とつながり、天王社を八雲社と改称したのであろう。

出羽の歴史散策マップ

[illegible]

出羽の歴史を知る名所旧跡



① 十王堂集会所

「十王」とは冥土の裁判官のことを指し、ここには閻魔大王を含む十王像や奪衣婆（三途の川を渡る前に亡者の衣服を剥ぎ取るという）像が祀られている。



② 稲荷神社

橙の木が御神体であり、この木の皮でなでるといぼが治るとされ、お礼に油揚げを奉納したという。「疣稲荷」と呼ばれている。



③ 野尻薬王寺 (宮本町二丁目第二集会所)

本尊は薬師如来で、見ると目がつぶれるとの言い伝えがある。「薬師堂」とも呼ばれている。



④ 迎攝院

天文4年(1535)に開山した真言宗の寺院。徳川家からの代々の朱印状(市指定文化財)が保管されている。



⑤ 西福院 (谷中町三丁目集会所)

「谷中の観音堂」として知られている。集会所には円空仏(江戸時代に全国各地を行脚し12万体の像を彫ったと言われる円空上人作の不動明王三尊像)が祀られている。



⑥ 稲荷神社

かつての谷中村全体の鎮守で、谷中上組(谷中町四丁目あたり)と中組(谷中町三丁目あたり)で管理している。



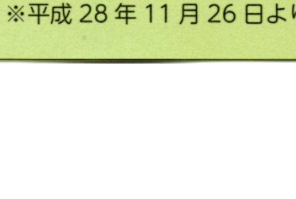
⑦ 谷中下組の稲荷神社

下組(谷中町二丁目あたり)の鎮守である。



⑧ ミツ谷の稲荷神社 (谷中一丁目自治会館)

「ミツ谷」とは現在の谷中町一丁目あたりにあった集落のこと。江戸時代初期は「三津新田」と呼ばれたが、「谷中村」に含まれるようになり、三津新田の谷中となったことから由来する。



⑨ 天王社 (神明町一丁目自治会集会所)

寛政5年(1793)の文字庚申塔がある。

⑩ 会田七左衛門家の墓所

ここは「月高山政重院」と呼ばれた寺院の跡地である。「政重」は会田七左衛門政重を、「月高」は政重の後妻の法名を指している。墓誌銘には七左衛門村の名前のもととなった、会田七左衛門家の歴史が記されている。



⑪ 神明社跡

元荒川の神明橋のたもと(右岸)には、「神明下村」(「神明の下村」とも呼ぶ)の鎮守であった神明社があった。神明社から下る部分の道を「下通り」と呼ばれたようで、それが村名の由来となっている。今は移転し、石塔のみが近くの土手斜面に残されている。

⑫ 神明社

大正年間に神明社は久伊豆神社に合祀されたが、昭和27年に一度移転。道路拡張に伴い平成12年に現在の場所となった。

⑬ 八幡神社

境内には直径1mはある松の大木の切り株が残っている。

⑭ 稲荷神社

「天神宮」と書かれた文久元年の文字塔がある。



※平成28年11月26日より、七左町二丁目は新越谷一丁目、七左町三丁目は新越谷二丁目に町名変更となります。



15 山王日枝神社 (七左町八丁目集会所)

延宝 8 年 (1680) の文字庚申塔がある。

16 上組の稲荷神社 (七左町上集落農業センター)

七左町上組 (七左町四～八丁目あたり) の鎮守。本殿にある神鏡には、「元禄 5 年 (1692) 開眼供養法印一道」とある。

17 観照院

元和 2 年 (1616) 会田七左衛門政重による新田開発工事の安全祈願として開基された真言宗の寺院。「観照」とは会田七左衛門政重の法名である。市文化財に指定された「木造会田七左衛門夫婦坐像」が安置されている。

18 下組の稲荷神社

下組とは七左町一丁目あたりの大下組、七左町二丁目あたり的高手組、七左町三丁目あたりの道下組を合わせた集落を指す。江戸時代には七左衛門村全体の鎮守であった。

19 出羽不動尊三明院

市内ただ一つの本山修験祈祷寺院である。幕末の安政 7 年 (1860) にできた。明治に修験道が廃止されるも、明治 21 年に再建された。

20 薬師堂 (新川町二丁目集会所)

昔、地元の人々が薬師様を背負ってきて安置したといわれる。

21 越巻の中新田の稲荷神社

中新田 (新川町 2 丁目あたり) の鎮守であった。地元では親しみを込めて「妙観照」とも呼ばれている。会田七左衛門政重ゆかりの神社である。(平成 19 年再建)

22 満蔵院・越巻学校開校跡

会田七左衛門政重が開いた寺院。明治 6 年にこの地で越巻学校が開校された。

23 丸の内稲荷神社

丸の内 (新川町 1 丁目あたり) の鎮守であった。

24 三社神社

もとは天神社があったという。東組 (大間野町二丁目あたり) の久伊豆社、上手組 (大間野町三丁目あたり) と向居組 (大間野町四丁目あたり) の稲荷神社、一の網組 (大間野町五丁目あたり) の弁天社の三社を合祀してできた。

25 光福寺

江戸時代初期に開かれたと推定される真言宗の寺院。門に龍の彫刻があり、葬式の時にこの下を棺が通ると軽くなるのは、龍が魂を食べるからだと言われていた。

神明町の獅子舞

神明町の獅子舞は、毎年 4 月 7 日に春祈禱、7 月 7 日に夏祈禱が昭和 44 年頃まで行われた。春祈禱は、神明社で祝詞をあげ、その後、獅子頭を付けた舞い人を先頭に、笛・太鼓・鉦を従え、長持をしながりに、氏子の家々を舞って歩いて家内安全を祈った。夏祈禱は「道切り」と称して、西側は岩槻道の荻島 (現・南荻島) との境まで、東側は岩槻道の四丁野 (現・宮本町) との境まで行って路上で舞った。それは、他から侵入してくる疫病を防ぎ、村から悪霊を追い出すために行われたのである。さらに 9 月 7 日の秋祈禱は単に獅子頭を神明社に飾り、その年の収穫を感謝するのみであった。同様に谷中町でも獅子舞が行われた。



出羽地区に伝わる昔話

26 やなか ばくば 谷中の白馬



谷中の観音様の本堂の中に、轡（くつわ）や鞍（くら）、花柄の大きな布をまとった白馬の絵がある。幅が1メートルもある大きな絵馬である。地元の人々の話では、昔から困った時にはこれにお祈りすれば白馬に神様が乗って来て助けてくれると信じられていた。この絵は、戦国の世にこの地域から戦いに出て傷ついた兵士を助けたのが白馬で、のちに助けられた兵士が描いたとのことである。その後、この白馬は谷中の守り神のようになり、大病にかかった人を治したり、悪いことをした人を改心させたりするようになったのだそうだ。また、太平洋戦争の時、この地域から出征した人々が重い傷を負って、生きるか死ぬかの時、例の白馬がどこからともなく現れ、傷の手当てをしてくれたという。現在、出羽小学校の正門側の外壁に描かれている白馬は、お祈りすれば神様が白馬に乗って助けに来てくれると伝わる谷中の観音堂の白馬のことである。

27 みつ やじぞう 三ッ谷地蔵



越谷から安行・鳩ヶ谷に至る赤山街道を約2km西へ行ったあたり（今の谷中町1丁目あたり）は昔は「三ッ谷」と呼ばれていた。ここから出羽小学校に行く十字路にあるお地蔵様は「三ッ谷地蔵」といい、次のようないわれがある。

七左町下組にある西川家に覚心法師というお坊さんがいた。このお坊さんは若い頃から山谷を越え、町から村へと旅を続けることが大好きだった。道中に哀れな人や困った人に出会うと、親身になって相談に乗り、悪人がいれば強く戒めるような人であった。しかし元文2年（1737年）今から280年前に悪人に殺されてしまった。そこで西川家は法師を祀って家の南西にお地蔵様を建てたところ、どうしたことが運の悪いことばかりが続き家中暗くなってしまう。そこで神主に見てもらうと、方角が悪いとのことだったので、西川家の東口に当たる三ッ谷橋の近くの十字路に移したところ、その後はみんな幸福に暮らすようになったとのことである。それ以降、願い事を頼めばなんでも叶えてくれると伝えられ、「三ッ谷地蔵」として多くの人々に親しまれている。

28 だいゆうざん ひ せき 大雄山碑石



越谷村（現在の新川町）の畑の中（現在は県道脇に位置）に「大雄山碑石」と書かれた大きな石がある。地元の人たちは「どうりゅう様」（「道了様」が地元でなまったもの）と呼んで大切にしている。ときどき花が添えられ、供え物があがっている。この石については次のようないわれがある。

近くに一軒の酒屋があった。この酒屋は7人の家族で幸福に暮らしていた。この主人は道了尊（神奈川県の大雄山最乗寺。寺の創建に貢献した道了という僧が完成と同時に天狗となって山に身を隠したということからこう呼ばれている。）を大変熱心に信仰していた。何か良いことがあると、どうりゅう様のおかげだと信じ込んでいた。ところがどうしたことが、主人はある時この信仰をびったりとやめてしまった。その後というもの、一家は災難続きで家族が病に倒れ、主人一人になってしまった。主人はどうりゅう様を思い出し、大雄山に行き、寺の石を持ち帰り、大雄山碑石という字を刻み、祀った。するとそれからは悪いことが起こらなくなったので、それを聞いた近所の人達までが、どうりゅう様を有難がって病気をしたり怪我をしたりすると、どうりゅう様にお参りするようになったという。

29 おおぬまだいようじん もののふじんじゃ 大沼大明神（兵主神社）



七左衛門村の中心部（今の七左町四丁目）に、石の鳥居をもち額束（がくづか）に大沼大明神と彫られた社があり、人々は「明神様（みょうじんさま）」「兵主神社（もののふじんじゃ）」と呼んでいる。毎年3月1日と10月1日には盛大な祭りをやっていた。この社の神は戦（いくさ）の神であるという。日露戦争の最中にこの社より不意に何千何百の鳩が飛び立ち、この地域出身の人々を守ったとも言われている。

この社は嘉永二年（1850年）作の石碑があるだけで他は不明であるが、地元にはこのような話が伝わっている。

今から560年ほど前の室町時代、まだ出羽地区南部が大きな沼であった頃、扇谷（おうぎがや）上杉定正に仕えていた太田道灌（おおたどうかん）が岩槻城を築くために部下の兵士に資材を船で運搬させた。ある秋、ようやく岩槻を目前にした出羽地区の沼組（七左町四丁目あたり）のところまで来た時に、気のゆるみが船が難破し、兵士ともども深く沈んでしまった。この霊を慰めるために、後年、新田開発が進み、集落が出来た後に残骸のあったところに社を建てたと言われている。そして誰言うとはなく「兵主神社」というようになったそうである。

ト記の通り、誤記がありましたので訂正いたします。

「表紙」・地図の真ん中辺り (誤) 七左衛門村 (機村) ⇒ (正) 七左衛門村 (機新田)

「地図」

・赤山街道 (誤) 関東都 ⇒ (正) 関東代官

・向かって右下隅の出羽堀跡の文字 (誤) 堀 ⇒ (正) 堀

「出羽の歴史を知る名所旧跡」

・⑩会田七左衛門家の墓所の「月高山政重院」のルビ (誤) せいじゅういん ⇒ (正) しょうじゅういん

・⑤上組の稲荷神社の()内 (誤) 七左町八丁目農業センター ⇒ (正) 七左町上集落農業センター

全体

「出羽の歴史散策マップ」（出羽地区コミュニティ推進協議会）より



四町野村（現・宮本町）



神明下村



七左衛門村（現・七左町）



越巻村（現・新川町）



大間野村



長 右 衛 門 新 田

金 右 衛 門 新 田

川のあるまち」第28号

新川と岩槻古道 — 新川は古綾瀬川だった —

加藤 幸一

Ⅰ 新川は古綾瀬川

綾瀬川の北側に綾瀬川と並行して見られる道が県道蒲生岩槻線で、この道に沿って流れている川が「新川」である。「新川」は、江戸時代は「古綾瀬川」とも呼ばれていた。元の綾瀬川という意味で、かつては綾瀬川の本流であつたと思われる。「新川」は、当時も旧越巻村 現、新川町、旧七左衛門村 現、七左町、旧大間野村 現、大間野町と流れ、綾瀬川に注いでいた。

「新川」は、江戸時代には「古綾瀬川」と呼ばれていたことが、長島村の名主であつた内山家の古文書の解読を進めている中で判明した。さらに、現在の綾瀬川は、古綾瀬川に対して「新綾瀬川」とも呼ばれたこともわかった。

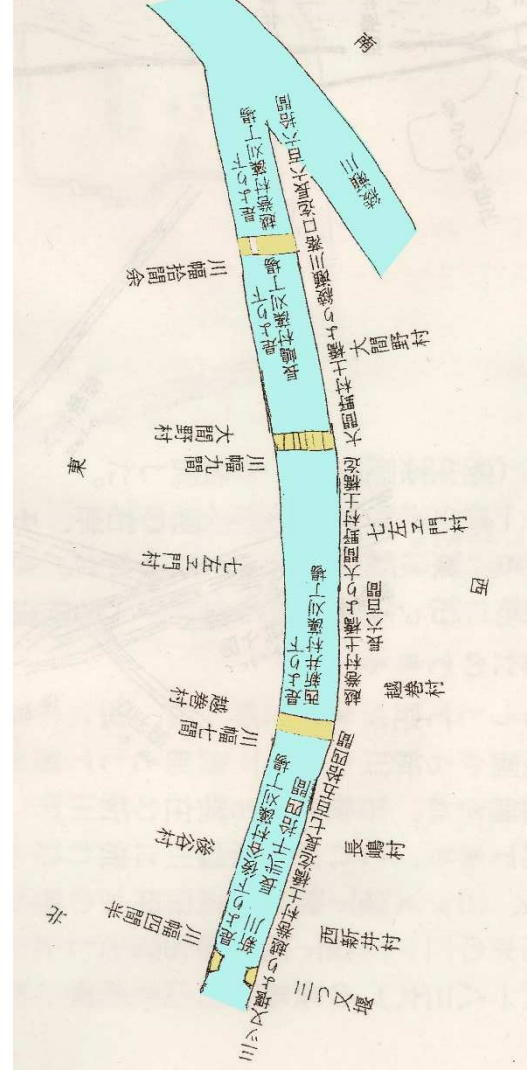
宝暦十二年（二七六）の長島村内山家所蔵の新川筋絵地図（図1）によると、「新川」は、現在の県民健康福祉村の北隣にある三ツ又堰より、この新川が綾瀬川に注ぐ綾瀬川の落とし口までを指している。川幅は、三ツ又堰付近では四間半、越巻村土橋では七間、大間野村土橋では、三ツ又堰付近の川幅の倍の九間となっている。当時の新川は下流へ行けば行くほど広がっていたこともわかった。

なお、三ツ又堰は、末田用水が出羽堀と悪水落とし（現在の新川）とに分かれる所にあり、堰が三ツ又になっているためこう呼ばれた。古くから移動することなく、同じ場所にある。

この絵地図によつて新川が江戸中期の宝暦十一年には既に定

成していたことがわかる。その当時の新川の様子を伝える貴重な資料といえる。新川は、実は二五〇年以上前に付けられた古い名称だったのである。

図1 宝暦11年（1761）の新川筋絵図面（長島村内山家所蔵）



② 長島村の五才堀付近の古道

内山家は、長島村の名主を代々勤めた家柄である。天保七年（一八三六）の長島村内山家所蔵の五才堀筋付近の絵地図 図2)の中で、寺」は 萬蔵寺」、神社の記号は 稲荷神社」、寺の東隣の建物は内山家である。格式ある内山家の周囲には囲い堀が見られる。

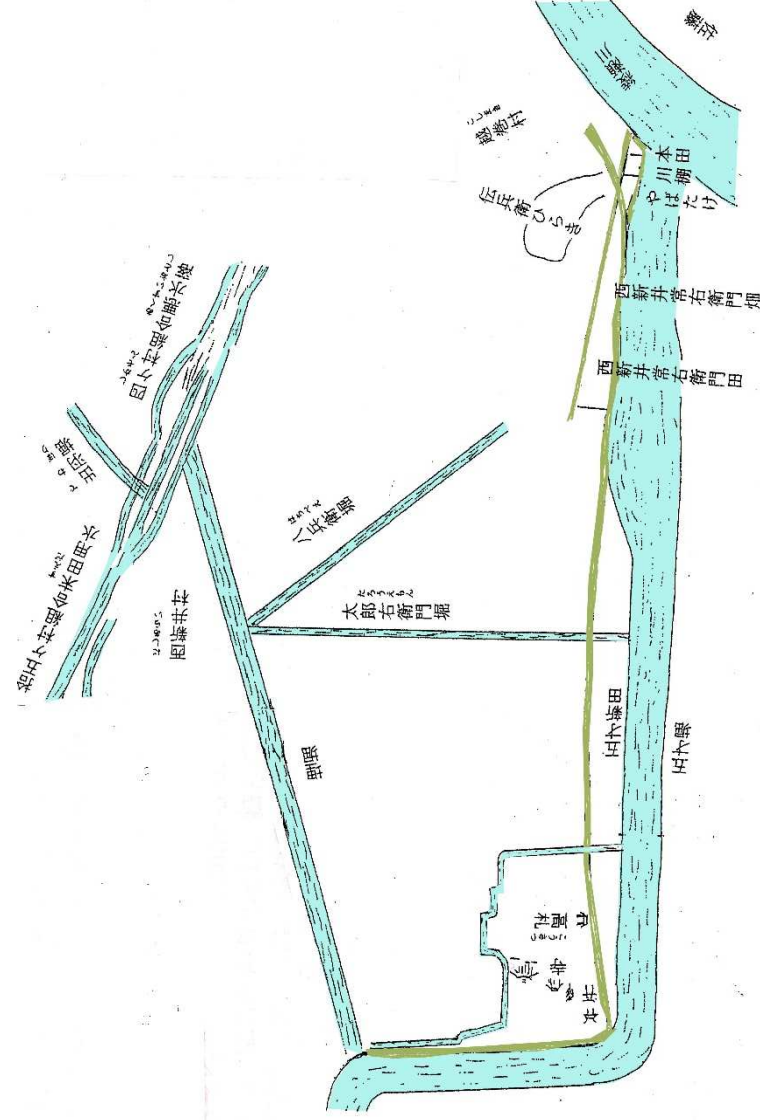
太郎右衛門堀の 太郎右衛門」は、長島村の内山家をさす。内山家の屋号は 太郎右衛門さま」である。

末田用水の三ツ又堰の下流は恵水落としとなっている。このことから、三ツ又堰より下流は、末田用水の恵水落とし、つまり排水路であり、これが古綾瀬川に流れ込み、新川の上流部として整備され、古綾瀬川も現在の新川町二の四〇〇の島村家の東側から新川の中・下流部として整備されたものと思われる。こうして完成された新川は、主に排水路として利用されてきたのである。

地図中の五才堀筋に沿って見られる道は、岩槻道」と呼ばれる古道である。東は新川筋に沿って伸びている。さらにその先は、現在の槍先 やりちやき) 通り、旧出羽堀の右岸、そして蒲生橋で日光街道（現在の蒲生茶屋通り）へと合流した。

内山家のそばに、昔の名残が現在にまで残る岩槻道がある。内山家の西隣には五才堀に架かる大堰橋があり、その大堰橋より五才堀筋に沿って北に伸びる農道が岩槻道である。江戸時代の名残を残す古道として、後世に残したいものである（写真1）。

図2 天保7年の長島村絵地図（長島村内山家文書より）



③ 七左衛門村の新川付近

かつての綾瀬川本流である古綾瀬川は、五才堀が綾瀬川に注ぐあたりから、現在の新川町二の四三三の斉藤家北側及び、二の四〇〇の島村家北側を通して 現在、この区間の川は埋められており、川の名残は全くない、今の新川筋へと流れていた。現在もその綾瀬川が新川に流れ込んでいたとの言い伝えが残っている。新川町 恒・越巻村) の地名はこの新川から採用したものである。

慶応三年 (二八六七) の七左衛門村井出家所蔵の七左衛門村付近の新川の絵地図 (図3) によると、この中に「古綾瀬川」と書かれた川がある。現在の新川である。出羽堀は古くからあり、現在の県民福祉村の北側にある三ツ又堀から東流してきた。

出羽堀は、江戸時代初期に越ヶ谷領を開発した会田出羽家 (現在の御殿町にあつた) の名前からきていると推定されている。

「新編武蔵風土記稿」という江戸時代の江戸幕府が編さんした本には、越ヶ谷宿の項目の中で、会田出羽介正之 (まさゆき) がこの地 (越ヶ谷宿の御殿町あたり) に住んで、堀を開き、その堀を『田羽堀』と唱えた」とある。

江戸時代は、新川 (古綾瀬川) の左岸 (北側) に沿って岩槻道があつた。岩槻道は、新川 (古綾瀬川) に沿って北西方向に直進し、新綾瀬川に突き当たる。次に綾瀬川に流入している五才堀の左岸に沿って北に進み、長島村の名主内山家のそばの大堰を通して現在の五才川橋交差点に向かった。この古道は地元では「往還」とも呼ばれていた。

また、絵地図の中央には観照院がある。この観照院から上 (北

東) 方向の道は、現在の出羽小学校に通じている。向かつて右 (南東) 方向の道は、赤山街道に突き当たる道である。その合流地点は、現在の赤山道と国道4号バイパスの交差点あたりである。

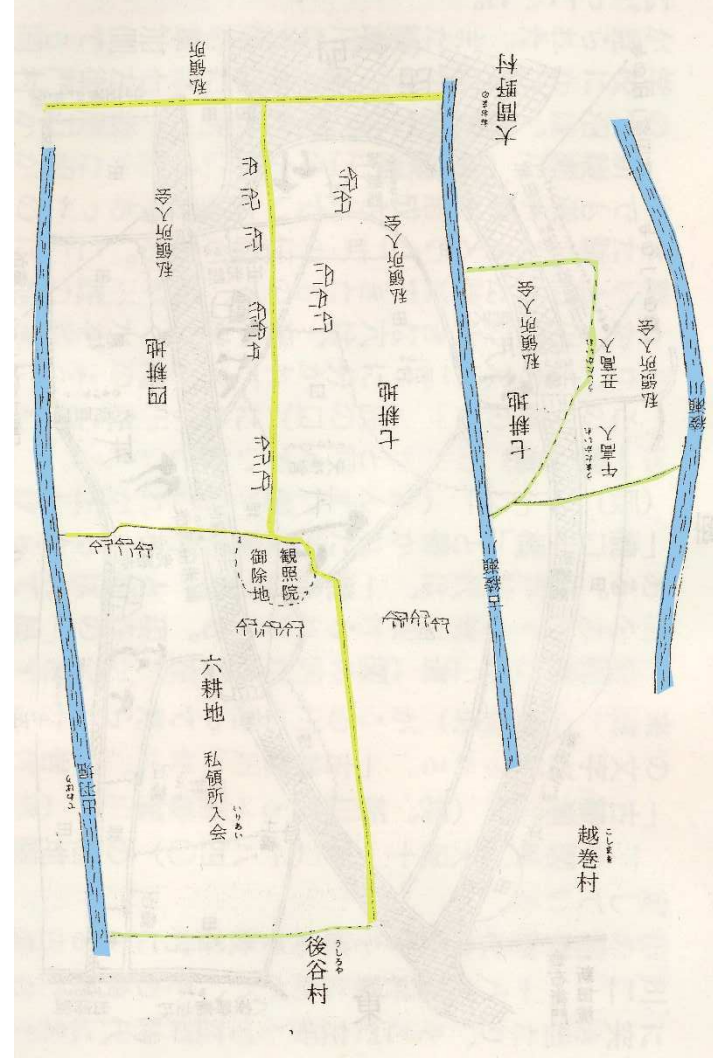


図3 慶応3年の七左衛門村絵地図 (七左衛門村井出家文書より)

⑤ 大間野村の新川と綾瀬川付近

天保十二年（一八四〇）の大間野村中村家所蔵の大間野村付近の綾瀬川筋の絵地図（図4）には、「古綾瀬川」（現新川）と「新綾瀬川」（現綾瀬川）の文字が書かれ、「古綾瀬川」に沿って、岩附（岩槻）往来道（岩槻道）と記載されている。

岩槻道と赤山道（図の向かって左）が交差する地点に新川を跨ぐ土橋が架けられている。現在の「辰の口橋」である。

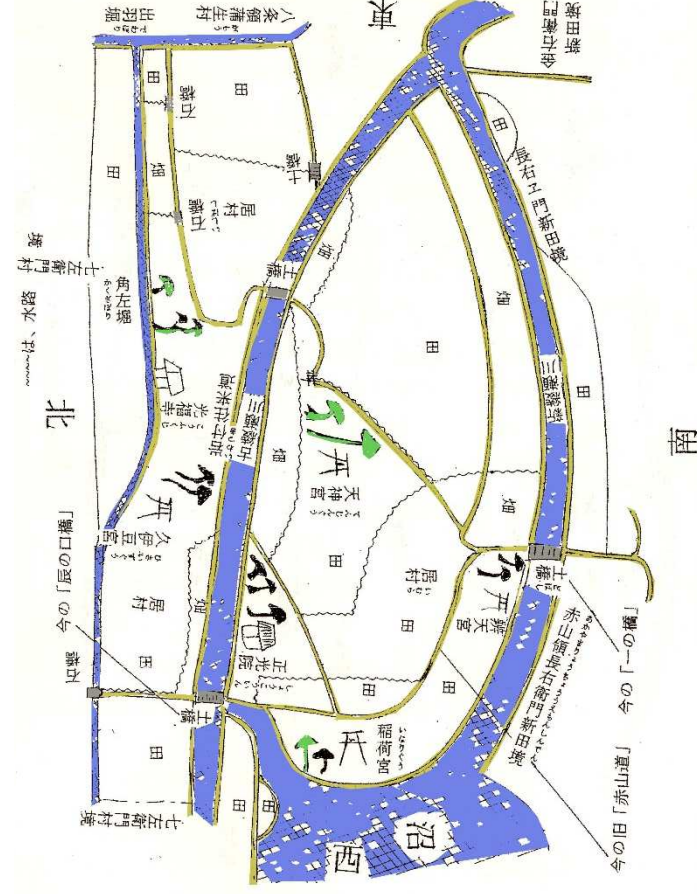
この「辰（竜）の口」には二つの伝説がある。一つは、赤山街道沿いの水路の水を新川の下をくぐって対岸に流すために作った穴に、水路の水が吸い込まれるように激しく落ち込んでいて、それが辰（竜）の口のようなのだと言われる。もう一つは、川底の下をくぐっている大きな穴は、竜が川底の地中から、激しく水を巻き上げ、空に舞い上がったときにくぐってできた跡であるという言い伝えである。

耕地整理が行われる昭和三十年代初頭までは、北から流れてきた赤山街道沿いの用水路が、新川の川底の下をくぐるように流されて（伏せ越し）いたが、新川の水面は、赤山街道沿いの用水路の水面よりもかなり低かったので、渦を巻くように激しく流れ込んでいたのである。そして新川の下をくぐり抜けた水は、対岸の高い土手道となっていた赤山街道の西側の地点から噴き出すようにして出て、「生け簀」に流れ込み、その水は、すぐそばの「大沼」に落とされたり、赤山街道を越えて、赤山街道の東側の、現在の大間野町四丁目や五丁目に用水として流されたりしていた。

「新綾瀬川」（現綾瀬川）の上流には「大沼」と呼ばれる今で

は考えられない広大な沼があった。この大沼は、越谷側では、現在の新一ノ橋周辺から武蔵野中学校にかけて広がり、七左衛門村の大沼神明（もののふ）神社）がその大沼に面してあった。また綾瀬川の対岸の草加方面へも、この大沼が同様に大きく広がっていた（図4）。

図4 天保11年の大間野村絵地図（大間野村中村家文書より）



一ノ橋 図5の新綾瀬川に架かる土橋)は、江戸時代は「
の網 あじ土橋」と呼んでいた。これがいつの日か「二ノ橋」
と呼ばれるようになったと思われる。

あじ」とは、地元の方言「あじあみ」のことかもしれない。

あじ網」とは、越ヶ谷言葉集「方言と訛集 改補編」越谷市
郷土研究会理事 山崎善司著)によると、川を仕切り船に取り
付けた大網で、上り魚を捕る漁法であるという。

角左 かくざ)堀は、大間野小学校の北側を流れる現在の排
水路筋である。

図4で、久伊豆神社の現在地は、光福寺の裏の大間野町二の
一〇〇のかつての太田家の跡地 現在、「パルコート越谷」のマ
ンション)あたりである。稲荷神社は、大間野町四の二五二の
一の町田家である。弁天社は、大間野町五の二三五の金子家で
ある。以上の三社は、慶応四年(一八六八)に天神宮の地に合
祀されて「三社神社」として今日に至っている。

なお、現在の綾瀬川は、桶川市小針領家の備前堤に源を発し、
葛飾区の中川に架かる上平井橋南側で合流する全長約三十九
キロメートルの中川水系に属する川である。

しかし、かつての綾瀬川は、足立郡と埼玉郡の郡境を流れ、
近世初頭まで荒川の主流であつたのである。

写真1

昔の岩槻道の名残が今も
見られる農道(内山家そば)

<北方向を見る>



現在は、かつての岩槻道と打って
変わって、人影が全くみられない寂
しい道となっている。

向かって左端は大堰橋、向かって
右方、写真枠の外に内山家がある。

図5 綾瀬川筋の絵図面(一部)
(長島村内山家所蔵)



新川（古綾瀬川）と岩槻道の地図

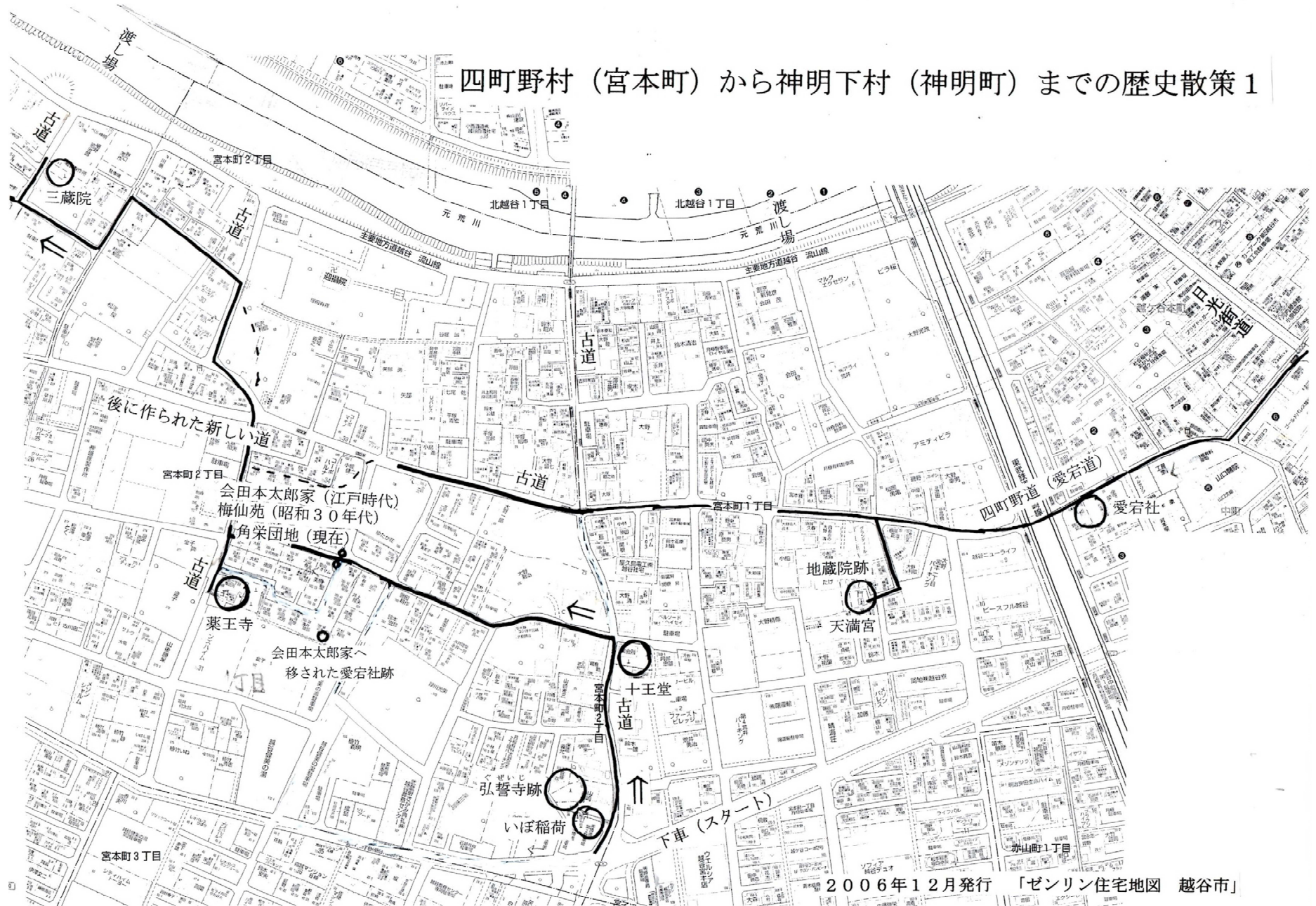


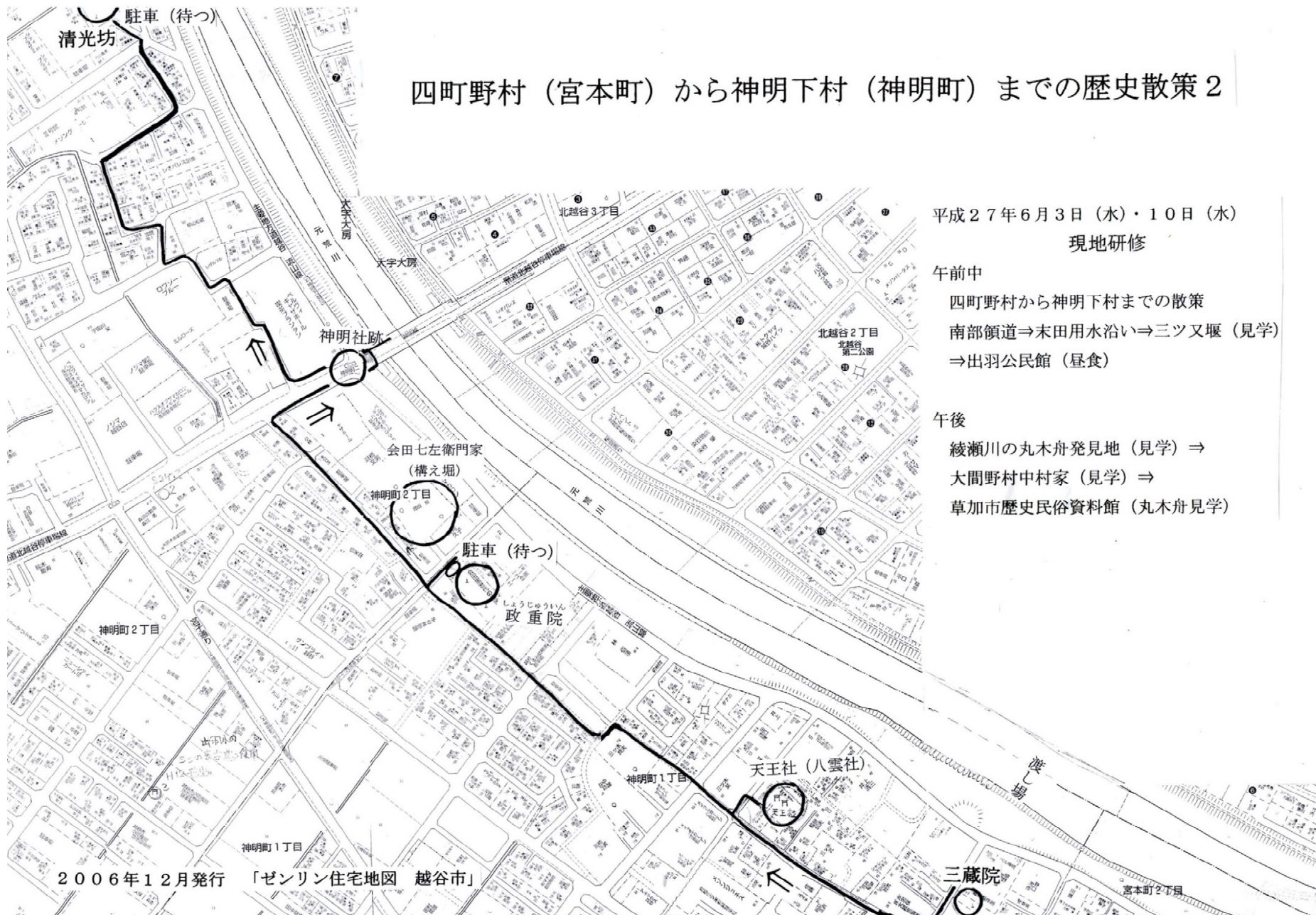
写真 2

三ツ又堰（健康福祉村の北側）
＜南方向を見る＞

- ・末田用水は、三ツ又堰（県民健康福祉村の北隣）から、新川と出羽堀に分かれる。→写真2
- ・現在の県道蒲生岩槻線に沿って流れる新川は、江戸時代は「古綾瀬川」とも呼び、現在の綾瀬川は、「新綾瀬川」とも呼ばれた。
- ・古綾瀬川（新川）の左岸（北側）に沿って岩槻道と呼ばれた古道があった。
- ・長島の内山家そばの五才堀の左岸にある農道は、昔の岩槻道の名残である。

四町野村（宮本町）から神明下村（神明町）までの歴史散策1





四町野村（宮本町）から神明下村（神明町）までの歴史散策2

平成27年6月3日（水）・10日（水）
現地研修

午前中
四町野村から神明下村までの散策
南部領道⇒末田用水沿い⇒三ツ又堰（見学）
⇒出羽公民館（昼食）

午後
綾瀬川の丸木舟発見地（見学）⇒
大間野村中村家（見学）⇒
草加市歴史民俗資料館（丸木舟見学）